

### ロンドンの救急医療を体験

7月25日の22:00頃、翌日からのオーストリア出張準備をしていた時、突然左目に違和感を覚え、鏡を見てビックリ仰天！白目の部分が真っ赤になり、白目全体がみるみるうちに腫れあがり、明らかに何らかの原因で眼球内の出血が起こった様でしたが、痛みはなく、ただ何とも言えない違和感が続きました。

早速、NHS (National Health Services - 国民医療制度) の医療相談窓口であるダイヤル**111番**にコンタクトしました。状況を説明すると、眼球の狭い範囲の出血なら自然に2,3日で完治するが、白目全体の出血の様なので、専門病院で診てもらった方が良いとの判断で、救急車が手配され数分後に自宅に到着、普通に歩いて救急車に乗り込み、ベットでなくシートに座り、血圧と血流酸素濃度が走行中も記録され、青色回転灯（日本は赤色灯）を点灯しとサイレンを鳴らし、約15分後の22:40に、ロンドン市内の **Western Eye Hospital** (西部地域眼科専門病院) に到着しました。



日本のより一回り大きいロンドンの救急車、内部は高さ2mはありそうです

目の病で救急搬送されたので理由を聞くと、出血が多く黒目部分に浸潤すると失明の恐れもあるので、一刻も早い治療が必要との医療相談窓口の判断で救急車が手配されたと、救急車に同乗していた救急救命士が話してくれました。

早速、救急外来処置室で、医師の診断を受け、視力検査、眼圧検査、血圧測定、採血、血流酸素濃度測定、眼球詳細観察が行われ、治療は高くなった眼圧を下げる飲み薬と点眼薬が主体でした。後は、腫れあがった結膜の出血が落ち着くまで、経過観察が必要とのことで **Observation Area** (症状観察室) に移動、結局出血が止まるまで、丸一日の入院となりました。退院時に、二週間の集中治療が必要と言われ、毎日の通院となりました。

通院二日目は、上下瞼の腫れもひどくなり、目の周りに沿って青くあざが表れ、まるでボクサーが殴られた様相になりました。医者は、腫れのピークは3~4日で、それを過ぎると落ち着く方向に向かい、視力も回復するので心配はいらない、と言われ半信半疑でした。診察の後、病院内の **Photo Room** (写真撮影室) に案内され、そこで目の動きを撮影すると言われ、正面正視と以下、顔は動かさずに、目だけ真上, 真下, 右, 左, 右上45° , 左上45° , 右下45° , 左下45° と9枚の写真をが撮られました。これは治療記録として必要とのことでした。

根本原因ははっきり判りませんが、結膜内の毛細血管が何らかの理由で破れて、出血し白目の部分に拡散し結膜を下から押し上げるほどのひどい出血だった様です。

今日、8月14日で出血から三週間になりました。すっかり眼球と上下瞼の腫れも目の周りの青い出血痕も、医師が言っていた様に落ち着きました。しかしまだ白目の目頭側に少し赤みが残っていますが白内障、緑内障の兆候もなく、視力も普通に戻りほっとしています。

ところで、英国の警察、消防、救急の緊急時のダイヤルは **999 番**です。ダイヤルすると「警察ですか？消防ですか？救急ですか？」と聞かれ「救急」と言うと、救急センターにつながります。しかし無駄な救急車 (**Ambulance**) の出動を避けるため、まず **NHS** の医療相談センター **111 番**にダイヤルして、専門相談員のアドバイスを受け、専門相談員によって、救急車の出動の有無が判断され、上手く棲み分けが行われている様です。但し心臓発作や呼吸困難等、明らかに重篤な症状で救急車が必要な場合は、この限りではありません。

今回、私が受けたロンドンでの救急医療は、発症から通報、救急搬送、病院の救急処置、治療、経過観察、退院までの一連の流れの中で、係わってくれた救急隊員、医師、看護師の方々は正にプロフェッショナルで、ロンドンの救急医療の質の高さを実感しました。

眼科病院での治療は終わりましたが、この後は、居住地域のホームドクターがフォローすることになっています。私も、かつてロンドン駐在時代に家族全員が登録されていた、近くのホームドクターに、目の病の報告に伺ったら、何と今回の一連の治療経過が既にホームドクターのコンピューター上で共有されていたのには、驚くと共に、英国の **NHS** (国民医療制度) の運用の素晴らしさの一端を、垣間見ることが出来ました。(了)